

仕 2009b). このような事業は、事故等が原因で保護された傷病個体を野外への復帰を前提に救護し訓練する施設とそこに専従している経験豊かな獣医師たちにも支えられている。

希少種保全のために動物園が果たす役割ももちろん大きい。国内で唯一シマフクロウを公開している飼育施設、釧路市動物園では、1995 年以降 2010 年末までに 13 個体の雛が育っている（釧路市動物園資料）。野生個体群を補強する存在として、飼育下で繁殖が継続している意義はきわめて高く、今後、動物園で生まれた個体の野外への導入も、分布拡大に向け大きな課題である。

野外で、あるいは飼育施設でシマフクロウに向き合い、会えば個々の主張を戦わせ時には対立する我々保護増殖分科会委員を束ね、何とか同じ目的に向かわせているのは、事業開始当初から座長を務める阿部永（元北海道大学教授）と藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）の功績が大きい。常に客観的視点から事業を見渡し、識者として適時に適切な言葉を発することで、分科会の難局を救ってきた。

保護増殖事業主体は環境省と農林水産省だが、これらの省庁に研究者の居場所がきわめて少なく、この四半世紀の間、シマフクロウに関する専門知識を蓄積し提供するのには常に外部の研究者や協力者であった。我々が事業者と共にシマフクロウ保護に責任を負っているのは言うまでもなく、顔ぶれに変化が少ないまま年齢を重ねているのも当然の成り行きかもしれない。対照的に、行政担当者は目まぐるしく交代するため、専門性が養われない上に責任の所在が不鮮明になりがちだ。貴重なはずの資料が失われたり、不十分な引き継ぎで事業の進行が妨げられるのは珍しいことではない。

「種の保存法」に基づき保護増殖事業が実施されている陸生鳥類 11 種のうち 4 種、シマフクロウ、タンチョウ *Grus japonensis*、オオワシ *Haliaeetus pelagicus* とオジロワシ *H. albicilla* が北海道に生息している。環境省や農林水産省が、これら鳥類種に精通できる若手研究者を雇用し、北海道で研究と事業の調整に専念させれば、保護事業の効率と継続性が格段に向上することは間違いない。外部の研究者頼みの保護事業は余りに基盤が脆弱である。

学会から鳥類保護への最大の貢献は人材の輩出だと思う。博士の学位を得た優秀な若手鳥学会員たちが続々と大学から巣立っているのに、その能力を国が活用せず自前の研究努力を放棄し続けたままで、シマフクロウを含む希少鳥類の先行きは果たして安泰だろうか。

## 引用文献

- 早矢仕有子 (1999) 北海道におけるシマフクロウの分布の変遷—主に標本資料からの推察。山階鳥研報 **31**: 45–61.
- 早矢仕有子 (2009a) 生息地保全が大切ではないか? : シマフクロウ。山岸 哲 (編著) 日本の希少鳥類を守る: 75–98. 京都大学学術出版会, 京都.
- 早矢仕有子 (2009b) 北海道北部へのシマフクロウの人為的移動。保全生態学研究 **14**: 249–261.
- Hayashi Y (2009) Close inbreeding in Blakiston's fish-owl (*Ketupa blakistoni*). J. Raptor Res. **43**: 145–148.
- Hayashi Y & Nishida-Umehara C (2000) Sex ratio among fledglings of Blakiston's Fish-owls. Jpn. J. Ornithol. **49**: 119–129.
- 北海道教育委員会 (1977) エゾシマフクロウ・クマゲラ特別調査報告書。北海道.
- 永田洋平 (1972) 主として北海道東部におけるシマフクロウの生態について。釧路市郷土博物館報 **217**: 2–9.

## 日本雁を保護する会の活動

呉地正行 (日本雁を保護する会)

日本雁を保護する会は、古来より日本国民に親しまれ、1950–60 年代に急激に減少したガン類を中心とするガンカモ類の鳥類とその生息環境の保護・保全・復元をはかるための調査研究と、啓発普及活動の推進を目的とした活動を行っている。

当会は 1970 年 9 月に宮城県仙台市福田町でのガン類の密狩防止を契機に「福田町の雁を保護する

会」として発会したが、1971 年 1 月「雁を保護する会」と改名しガン類の全国禁猟を要望する署名運動を開始し、「マガン、ヒシクイの狩猟禁止と、天然記念物指定」に向けた陳情を農林省と文部省に行い、ガン類の法的保護の実現に貢献した。

1970 年代には、国内のガン類の生態解明を行い、1975 年度より活動範囲を全国のガン類渡来地

へと拡大、1981年には国際水禽湿地調査局；IWRB（現・国際湿地保全連合；WI）ヒシクイ調査グループに参加した。1982年8月に、ソ連（現ロシア）科学アカデミーとの共同調査に合意、1984年7月からカムチャツカ半島でのヒシクイ首環標識調査を支援し、1991年から共同現地調査を開始し、日本へ渡来するヒシクイ2亜種（*A. f. serrirostris* と *A. f. middendorffii*）が、カムチャツカから飛来することを明らかにした。1983年9月、仙台市八木山動物公園と「仙台雁研究会」を結成し、越冬地放鳥によるシジュウカラガンの羽数回復計画を策定実践し、1995年から千島エカルマ島での繁殖地放鳥を開始した。その後渡りを行う群れが定着し、その数も増え2011/12越冬期には250羽ほどの群れが飛来するようになった。

1990年度には、9月に環太平洋7ヶ国で構成されるガン類研究の「旧北区東部湿地ネットワーク」に加盟、10月にIWRB日本委員会に加盟した。1991年度には、「日本雁を保護する会」と改名し、7月にソ連（カムチャツカ半島・西部大平原とチュコト半島・アナドゥリ低地）で初の日ソ共同現地調査を開始し、以後ソ連崩壊後の北東ロシアでの共同調査を継続してきた。1992年度にはハクガンの渡り復元日米ロ共同事業を開始し、その国際会議を仙台で開催した。1993年度には、ガン類生息地の開発予防を目的にガン類渡来地目録を刊行し関係自治体等へ配布し、その重要性の周知を図った。また韓国でのガン類分布調査も開始した。日・米（USGS）共同で宮城県・伊豆沼周辺で捕獲したマガン10羽に人工衛星用送信機を装着し、マガンの渡り経路とチュコト南部が繁殖地域であることが特定できた。1994年度にはカムチャツカでヒシクイの営巣調査を行い、韓国、中国のガン類越冬地調査も行った。また北アメリカ極地ガン会議（NAAG）に参加し、ハクガン復元計画の経過を発表した（カリフォルニア）。1996年度には新たに蕪栗沼周辺でのガンと農業の共生をめざした湿地保全活動を開始し、ガンと農業の共生をテーマに第12回ガンのシンポジウムを開催し、「蕪栗沼宣言」を採択した。1997年度には中国洞庭湖でカリガネの個体群調査を開始し、1998年度には第4回WIガン類専門家国際会議を日本（松島町）で開催し、水鳥の生息地としての水田の湿地機能復元や冬期湛水水田（のちに「ふゆみずたんぼ」と改名）普及活動を開始した。1999年度には東アジアガンカモ類重要生息地ネットワークガンカモ類ワーキンググループ議長とフライウエー

オフィサーを当会が担当するようになった。

2000年度には地球温暖化が渡り鳥のガン類に及ぼす影響調査と、アムール川下流域でのサカツラガンの分布生態調査をロシアと共同で開始し、国内ではふゆみずたんぼを用いたガン類生息地の復元と水田農業との共生をめざす取り組みを関連団体と開始した。2003年度には、日ロ共同でチュコト地方のマガン繁殖地で生態・標識調査を開始し、ガンカモ類重要生息地の保全と啓発に関わる国際ワークショップ、アジア太平洋地域渡り性水鳥保全戦略会議（マレーシア）へ参加、関係5カ国による絶滅の危機にあるサカツラガンとトモエガモの行動計画実施のためのタスクフォースへの参加及びその活動支援を行った（2003-04）。2004年度には、ふゆみずたんぼを用いたガン類と農業の共生とその啓発活動を拡大し、環境省のラムサール条約湿地選定検討委員会委員（2004-05、2009-10年）として、新たなラムサール条約湿地登録に関わり、水田は水鳥の重要な生息地にもなる農業湿地という認識を高め、水田に注目した初の条約湿地「蕪栗沼・周辺水田」誕生に貢献した。2005年度には、ラムサールCOP9（ウガンダ）期間中の複数のサイドイベントでふゆみずたんぼと蕪栗沼・周辺水田での取り組みについて講演し、水田の湿地機能をアピールした。ガンカモ類ワーキンググループ議長として各種国際会議に参加し、大潟村全域のネットワークへの参加実現に貢献した。韓国洛東河河口の湿地保全のために韓国NGOと現地調査を行い、北ユーラシアのガン・カモ・ハクチョウ国際シンポジウム（サンクトペテルブルグ）で講演し、ロシア、中国関係者との交流を深め、これまでの活動をまとめた「雁よ渡れ」が、どうぶつ社より出版された。2006年度には、蒲生自然再生協議会に参画、日本鳥学会大会・公開シンポジウムで冬期湛水水田におけるガンカモ類との共存について講演し（盛岡市）、日米・日ロ渡り鳥条約会議に専門家として出席（東京）、東アジア・オーストラリア地域フライウエイ・パートナーシップ（EAAFP）会議に参加し（ボゴール）、スペイン・エブロデルタ等を視察し、ふゆみずたんぼを活かした湿地管理についての意見交換を行った。日韓渡り鳥協定会合（チャンウォン市）、大崎市マガンの里づくり計画検討委員会に参加した（2006-、大崎市）。シジュウカラガン羽数回復の啓発講演会を八木山動物公園と共催し、環境省環境技術開発等推進費研究開発による、水鳥と共生する冬期湛水水田の多面的機能の解明と自然





2010年9月10日、北千島エカルマ島でのシジュウカラガン最後の放鳥風景。

共生型水田農業モデルの構築に関する研究に参画した。2007年度には、日欧共同ワークショップ・シンポジウム「生物多様性と持続的発展」に参加・講演し（ベルリン，豊富町，豊岡市），韓国の行政，農民，環境NGOの蕪栗沼・周辺水田視察案内と水鳥と共生した農業について意見交換の場を設けた（大崎市）。2008年度にはアジア湿地シンポジウムに参加講演し（ハノイ），1999年以降毎年日本鳥学会大会自由集会として開催しているJOGA10回集会で、「ガンカモ類外来種の現状と対策及び今後の課題」を共催し（立教大学），国内のガン類の生態と生息地の気象調査を実施した。ラムサールCOP10に参加し水田決議採択を支援し（昌原市），EAAFP関係者会議に参加した（2008，09年，仁川市）。中国ガンカモ類ネットワーク立ち上げシンポジウムに参加講演し（北京），中国湖南省・洞庭湖でカリガネを中心としたガン類共同調査を行った（岳陽市）。トリインフルエンザに関し，大崎市，日本獣医師学会シンポジウム（盛岡市），登米市（2009年）で講演を行い，シンポジウム「雁と鴛」（新潟市）で講演を行った。2009年度には，EAAFPに基づく，チュナム貯水池（韓国）と蕪栗沼・化女沼湿地交流NGO覚書作成を企画実現し（大崎市），ラムサール市町村連絡会学習会で基調講演し（加賀市），温暖化とマガンの越冬地北上についてWWFの「温暖化の目撃者」の取材を受けた。

モニタリング1000推進検討会に委員参加し（東

京），トキと共生した農業シンポジウムで講演した（佐渡市）。ガンカモ・モニ1000検討会（米子市）と，宍道湖でのヒシクイ捕獲標識調査に参加した（山階鳥類研究所，野鳥の会鳥根と共同）。オオヒシクイ・シンポジウムで講演し（新潟市），南関東エコロジカルネットワーク委員会（浦和市），化女沼湿地保全活用研究会に委員参加した（2009年－大崎市）。2010年度は，オオヒシクイの生息地・天塩川振老旧川の緊急調査を開始した（天塩町）。CBD COP10 事前会合（SBSTTA14）会議に参加し，我々NGOの発意に基づき日本政府が提案した水田の生物多様性関連決議案の支援を行った（ナイロビ）。シジュウカラガン回復計画について講演し（加賀市ほか），環境省等主催の，水田と湿地保全の国際ワークショップで基調講演した（高島市）。よみがえれシジュウカラガン・みやぎキャラバンを実施し（宮城県内），日ロ共同シジュウカラガン羽数回復事業のために千島を訪れ最後の放鳥（13年間で総計551羽）を行い（ロシア），日本鳥学会自由集会JOGA13回「希少亜種シジュウカラガン *B. c. leucopareia* と大型外来亜種カナダガンをめぐる最新報告」を共催し（東邦大学），世界湖沼フォーラムで温暖化とガン類越冬地の北上について講演し（大津），生物多様性条約COP10に参加し，EAAFPサイドイベントで講演し，当会を含むNGOが起案から関わった水田関連決議及び国連生物多様性の10年決議の採択を支援する一連の活動を行った（名古屋）。